

# 仏典を読む(九)

## 仏説阿弥陀經を読む

米田賢次郎

また外道に対するシゴキかと思つたが、『鷹陵九三号』に「考える宗教」を書いたばかり、これはどうやら私のヒガミ。この欄は仏教学の非専攻者が、次々と仏典を読んでの感想を書くことになっているらしい。私も先学の驥尾にふして悪文を綴らざるをえまい。

まずどのお經を読むべきかが問題である。長いのは困まる。難かしいのはより駄目。結局家にある『浄土日用勤行式』から「仏説阿弥陀經」を選んだ。何度か読んだことがあるし、訳者「姚秦三藏法師鳩摩羅什」は高校の教科書にもある著名な名僧である、というのが理由である。

今迄に何度か阿弥陀經を音誦してきたが、リズムカルだなあと感じただけで、中味を考えたこともなかったが、必要になって多少勉強し目を凝らして見ると、そこは漢字の有難さ、意味も全然わからぬこともない。原田順亮師『浄土三部經通俗講話』等々を参考にした私の理解では、大体次のような内容であらうと思うのである。

序文 いま尊い阿弥陀經を説いておくぞよ、との宣言

正宗文 (イ)西方十万億の彼方に阿弥陀様の支配する極楽浄土がある。其処は八功德の水のたたえた七宝池、金銀瑠璃の樓閣があり、見も知らぬ鳥がお經を唱える如く囀り、また多くの仏様が常に有難いお經を聞かせて下さる結構なところである。

(ロ)お前達が其処にゆくには、この世で善根を積むだけでなく、一心不乱に念仏を唱えねばならぬ。尤も善根と人柄の差により、一日の念仏でよい人から七日かかる人もあるが、お念仏によつて誰もが阿弥陀様に迎えられることが出来る(こゝがお經の正念場)。

(ハ)念仏さえ唱えれば極楽にゆけるとは話がウマすぎて信じ難いだろうが、これは今迄私が説いてきたことであるし、六方界の諸仏も証明している。また私は諸々の仏様の言は間違いないと信じるし、仏様達も私がこの信じ難いことをよく説いてきたと賞讃してくれている。これで私の言の間違いないことが実証されるであらう。

流通分 この説教を聞いて、舍利弗以下歡喜信受して、礼をして立去った。

一読してまず私の感心したのはその論証法である。釈尊が説教の正しさの証明として、自証（自分が信じている）、他証（諸仏も認めている）、互証（釈尊が諸仏を信じ、諸仏が釈尊を賞讃すること）の系統をとっている。中国で実証法の最も水準の高い清朝考証学では、系統の異なる二つ以上の証拠の提示を実証の必須条件としているという。とすれば、この阿弥陀經の論証法は、清朝考証学のレベルに充分に達しているといえよう。印度の思考には時間の觀念が乏しいといわれるが、他方これを補なうすぐれた論理の構設があるようにも思われる。

次に感じたことは、阿弥陀經（従つて淨土宗も）は本来甚だ厳しいもの、ということである。念仏日数は機根によつて異なるが、七日間は勿論一日だけでも雜念を持たずに念仏を唱えよという要求は、單純なだけに難事中の難事に思われ、これでは誰もが救われるゾ、といいながら誰も極楽にゆけそうもないだろう。この難事をしとげるには、絶対の帰依、換言すれば念仏を唱えるという動作——現在自分の行っている動作——は絶対のもの、という不動の信念が必要であろう。とすれば阿弥陀經はこの信仰（帰依）の境地に立ち得る者にこそ初めて意義あるといえるものであつて、釈迦の説かれた最も尊いお経といわれるのも当然かと思わ

れる。かつて森鹿三先生が、中国の学者の中には、一字の校訂に命をかけた人もいるのだよ、といわれたが、どの道においても、その道のゆきつく所は、各自の作業に不動の信念を持つ、ということかも知れない。

ところで、不動の信念を持ち、絶対の帰依即ち三昧發得の境地に達するということは、まずすべての濁と苦惱を経験し、絶対絶命の境を経た人でないと無理であろう。とすれば鳩摩羅什が阿弥陀經を訳したのは、当時中国は北方異民族の下で、漢民族の一般庶民が空前の苦難を受けていた時代であるから、その人々を眼前にしていることに相違ない。まさに彼は「娑婆国土の五濁惡世の、却濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の中に、よく阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸々の衆生のために、この一切世間難信の法」を説いた、釈迦の心を心としてこのお経を訳したに相違あるまい。彼が臨終に際して「私の説教に間違つた所がなければ、きつと舌だけが焼き爛れないであろうといったが、弟子達が茶毘に附したあと、灰の中で舌だけがピク／＼動いていた（梁高僧伝二、羅什伝）」という話があるが、彼の信念を物語る話であろう。

私の感想は、編集氏の期待したであらう、「素人なりに經典を如何に内在的に理解するか」ということから全く外れてしまったが、それは仏教が深遠宏大だからに違いない。

（よねだ けんじろう 文学部教授）